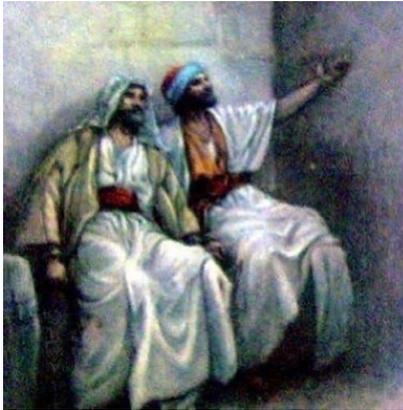


2023年11月5日 説教「全家族の救い」

使徒の働き 16章 26～34節

ピリピの地において、占いをしていた女がパウロ達の後について来て邪魔をするので、パウロはキリストの御名によって彼女から悪霊を追い出しました。利益を損じた主人たちはパウロ達を役人に訴えます。取り調べた長官はパウロとシラスを投獄します。真夜中、二人は主に賛美をささげ、囚人たちもそれに聞き入っていました。



### 1. 獄中の奇跡 (26～28節)

①大地震が起こり (26) 「ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。」

賛美の歌が広がる麗しいその時に思ってもみないことが起きました。大地震が襲ったのです。獄舎全体が揺れ動いて、扉はどれもこれも開いてしまい、囚人につけられた鎖も解けてしまいました。普通ならチャンスとばかり囚人たちが逃げ出すところでありましょう。しかし、パウロとシラスは囚人たちに、獄にとどまるように諭したのだと思われます。

②看守は自殺をしようと (27) 「目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。

一方、地震に目を覚ました看守が見たものは絶望的状態でした。牢の扉があいてしまっていたのです。看守は囚人たちが逃げてしまったと思いました。彼に与えられた務めは、囚人の警備であり、脱獄されれば、罰として死の宣告を受けることは必定だと思われました。彼はもはや自殺しかないと思いました。

③パウロの叫び (28) 「そこでパウロは大声で、『自害してはいけない。私たちみなここにいる。』と叫んだ。」

しかし、看守が自らの命を絶たんとしたその時に、パウロは叫んだのです。「自害してはいけない。我らはここにいる!」。看守は言われていることがすぐには理解できませんでした。囚人たちが逃げないでそこにいるということは、にわかには信じがたいことだったからです。

### 2. 救いの要件 (29～31節)

①看守は駆け込んで (29) 「看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。」

ともかく看守はあかりを携えて、パウロやシラスのいる牢獄に駆け込みました。そして、パウロもシラスもそこにいるのがわかりました。また、他の囚人たちが逃げないでいることを確認したことでしょう。この信じがたい事態をみて、看守はパウロとシラスの前にひれ伏すしかありませんでした。自分の命を失わなくても済んだことにも、驚きと安堵でいっぱいだったことでしょう。



②救われる為に (30)「そして、ふたりを外に連れ出して、『先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。』と言った。」

そして、看守はパウロとシラスを牢の外に連れ出して言いました。明るい所で、たずねたかったのでしょう。重大な質問でした。「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」。獄中の賛美や奨励をそれとなく聞いていました。伝えられていることは真理に相違ないと思っていました。そこに来て、今回の出来事です。人の救いの道を彼らは知っていると思ったのでしょう。だから、魂の救いを求めたのです。

③あなたも家族も (31)「ふたりは、『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。』と言った。」

パウロとシラスの答えは単純明快でした。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」というものでした。「今日、救いがこの家に来ました。」(ルカ 19:9)という主イエスの恵みのお言葉と相通じます。看守が信じるならば、主の救いの恵みは家族にも及んでいくという約束が伝えられたのです。

### 3. 家の者たちの救いとバプテスマ (32~34 節)

①家の者にみことばを (32)「そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。」

パウロたちは、主からの約束のお言葉が実現することを信じて、看守とその家族と家の者たちに御言葉を語りました。また、看守が家族たちに、起きた出来事を伝え、神の恵みを家族に証したことでしょう。

②バプテスマ (33)「看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取りその打ち傷を洗った。そして、そのあとすぐ、彼と、その家の者全部がバプテスマを受けた。」

看守は家族にも、御言葉が語られたことを知り、その夜のこと、パウロとシラスを引き取って、彼らが受けたむち打ちなどによる傷を洗いました。その後すぐに、看守と家族、家の者たちのすべてがバプテスマの恵みにあずかったのです。ここに「時を移さず」とか「そのあとすぐに」とあるのは、良きことが次々となされていく様子が示されています。それは、主ご自身自身が促し下さっていたと考えられます。

③救いの祝い (34)「それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。」

バプテスマを受けた後に、看守はパウロとシラスを家に招いて、もてなしました。そして、彼らは全家族が神を信じてバプテスマを受けたことを心から喜んだのです。

囚人を家に招くことなどできるのかという疑問があるかもしれませんが、看守の務めは、囚人をしっかりとあずかり、求められた時に差し出すことができるかどうかが大仕事だったのです。

### 《結論》

先週はパウロとシラスによる獄中の賛美について学びました。この世の最も美しい光景のひとつではなかったかとお伝えしました。もしその主への賛美が実況されれば、感動をもたらすものであったでしょう。他の囚人たちや看守も心動かされたと思われます。ところが、それが一瞬のうちに、どん底に突き落とされたのかとも思われる事態が起きました。大きな地震が発生したのです。看守にとってみれば、自分の命は助かったのですが、何よりも自らの任務である囚人たちを獄中に確保できずに逃亡される事態に陥ってしまったのです。牢の扉は開き、囚人を縛っていた鎖も解けてしまいました。彼にとっては絶望でした。自殺を考えました。しかし、パウロによって自害をしないようにと制せられました。囚人たちは皆、逃げずに残っているのです。これはある面での奇跡でした。主の御手が伸ばされたのです。パウロ達が伝えた主イエスの恵みのゆえです。その結果、看守はキリストの救いを求め、主の恵みによる救いにあずかることができたのです。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益ととしてくださることを、私たちは知っています。」(ローマ人への手紙 8:28)とあります。地震という困難な事態でありましたが、そのことにも働いて、主は看守を救いへと導いてくださったのです。そもそも、パウロとシラスが逮捕され、投獄されたことも、受け入れがたい事でした。しかし、それら「すべてのことを働かせて益ととしてくださる」のが主なる神です。仮に、難しい事態のなかにおかれていても、マイナスをプラスに変えてくださる主に心を信じていきたいものです。これが第一のポイントです。

第二のポイントは二週間前にも学びました。つまり、紫布の商人ルデアが女性の学び会で福音を聞き、キリストを信じるに至った時に、彼女とその家族も一緒にバプテスマを受けました。彼女は福音を聞いた時には、これは自分だけのものにしてはならないと思ったでしょう。記されていませんが、熱心に家族にも伝道したのだと思います。今ここに出てきた、獄の看守はパウロとシラスを通して、間接的に御言葉と祈りと賛美を聞いていました。影響を受けていたことでしょう。そこに地震が起きたのです。圧倒的マイナスです。しかし、パウロとシラスは逃げ出さずでした。彼らから諭しを受けたらう囚人たちも残っていました。自害しようとしていた看守にとって、それは衝撃でした。救いを求めました。すると、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と教えられました。看守とその家の者達は罪を贖うキリストの福音を直接に聞いて、信じました。そして、パウロとシラスを通して、看守及び家の者たち全部がバプテスマを受けたのです。ピリピの教会はこのようにして、家族ぐるみで信者となるケースが二つもありました。それがピリピの教会の特徴にもなっていたかもしれません。姉ヶ崎キリスト教会も、ピリピの教会に教えられていきたいものです。また、聖霊ご自身が教会の兄弟とともに、ご家族にも豊かに働いてくださるように。12月の伝道礼拝もそのために用いられるようにと祈っていきましょう。